「てんかん 支えが大切」

27日広島でフォーラム

井筒親方 経験語り理解訴え

収録で「みんなでてんかんを乗り越えよう」と語る井筒親方

てんかんと向き合いながら18年の現役生活を全うした元関脇豊ノ島の井筒親方(39)が、てんかんの啓発に力を入れている。両親や兄弟子たちに支えられ、厳しい稽古や取り組みに挑んできた勝負師は「てんかんは一人では乗り切れない。周囲は見放さずに支えて」と呼びかける。27日に広島市東区の広島県医師会館であるフォーラム「てんかんを考える～ともに働くために～」にビデオ出演する。

井筒親方は中区であった収録で、広島大病院てんかんセンター（南区）の飯田幸治センター長と対談。小学2年の時、初めてのてんかん発作で口から泡を吹き、意識を失ったと打ち明けた。相撲をやめることを覚悟したが、当時の指導者が才能を惜しんだ。主治医の「頭でなく胸を突き出す立ち合いなら相撲はできる」というアドバイスで続けられることになった。「両親がよく認めてくれた」と感謝する。

動画は中国新聞デジタルで

18歳で入門した時には、師匠や兄弟子にてんかんを隠さず説明した。21歳の時に宿舎で発作が起きた際は、舌をかまないよう口に手を突っ込んだ兄弟子をけがさせた。現在は口に物を入れる対応をしてはいけないが、親身な介抱がうれしかった。以後発作は一度もない。「安心して相撲に打ち込めたのは、てんかんを打ち明け、助けてもらえたから」と振り返る。

２０２０年まで土俵に上がり続けた井筒親方。仕事やスポーツの継続に不安を抱える患者がいることを踏まえ、「ためらわず助けを求められるよう、多くの人にてんかんを知ってほしい」と願う。

フォーラムは午後1時半～4時。小児てんかん患者の生活やロボット治療などを、飯田センター長たち専門医が解説する。ライブ配信もある。いずれも要予約。medical02@chu-ad.co.jp に申し込む。中国新聞アド☎082(247)6282。（田中謙太郎）

中国新聞の許諾を得ています

掲載日付 2022 年 11 月 9 日